

シンガポール心臓胸部外科修行

中尾 雅 一*

経 緯

私がひよんな縁でシンガポールに来てからはや5年が過ぎました。ここに来る以前は他の医局の先輩達のようにオーストラリアに行って臨床でHands-onを、という思いがあり、シンガポールの一文字たりとも脳裏にはありませんでした。機会というものは向こうから勝手にやって来るらしく、英語での履歴書作成をお願いしたマレーシア人に、「里帰りのついでにシンガポールに行くんだけど、一緒に行ってみないか？ 医療レベルは悪くないよ。」という訳で4泊5日の観光旅行兼実地調査のノリで2001年5月に始めてこの地を踏みました。第一印象は「暑い！でもきれい！」。観光の方はしっかり要所を押さえ、マーライオン、シティホール、マウントフェーバーのロープウェイからセントーサ島などなど観て廻りましたが、肝心の実地調査の方は散々。事前にメールで返事を頂いていたNational University Hospitalに2日目に行ってみましたが、連絡が上手くつかず、立ち往生。仕方なく通訳でおられた日本人女性に状況をうかがってみました。返事は「心臓外科？ そんなこと、この国でやってるはずがないでしょ。」所詮はそんなところかと思いつつも、ダメで元々ということでNational Heart Centreを訪れたのが帰る前日でした。通されたのは今、私が現在毎日出入りしているオフィスですが、当時のことは丸で覚えていません。ただ当時HeadだったMr. Chuaがえらくカジュアルだったことは鮮明に覚えています。エアコンの利いた部屋で、私はびっしり着込んだスーツ姿、かたやMr. Chuaはネクタイなし、袖はまくり上げ、シャツの一番上のボタンは開けっ放

し。対応もカジュアル。やり取りを想定したノートまで作った努力がむなしく思えるほど緊張感のない1時間でした。しかし、感想は「やっぱり来てみるもんだ。」症例数がCardiacのみで1,100例、Thoracicを加えると1,300例と聞き、急遽最終日の朝を手術見学に切り替えました。それでもまだ1枝バイパスとかだったらどうしよう、など思っていました。終わってみると3枝を9時スタート、針のカウントが合わず、探し回って、X線確認して、12時半にICU。帰りの便の都合で午後は見られずに帰国。その日から丁度2年後、オーストラリア滞在、シンガポール第2回訪問、続いて無給の見学生活半年間、その他様々な紆余曲折を経て、National Heart Centreの一員となり、現在に至ります。

シンガポール

シンガポールは赤道直下にある人口400万人の小さな国です。1965年にマレーシアから独立した50歳にも満たない新しい国でもあります。その小ささと海に囲まれた地理条件から、全くと言っていいほど天然資源を持たず、水すらも隣国マレーシアからの輸入に頼っている状態です。しかし、その反面、自国のIT産業、他国企業の誘致、また貿易などで成り立っています。「Green and Clean」のモットーの通り、都心部、観光地、空港などでは厳しい規制がしかれ、ポイ捨てなどは鞭打ち刑、また安全性の面でも、子供が真夜中に散歩していても全く問題なく、麻薬保持、拳銃発砲は死刑。国民構成は中国系が8割、その他をマレー系、インド系で占めています。日本企業も非常に多く、日本人駐在員だけでなく、日本人の永住権保持者も少なくありません。その為か、日本料理屋はラーメン屋から割烹まで、スーパーマーケットも伊勢

*京都府立医科大学心臓血管外科

丹や明治屋などの日系だけでなく、地元のスーパーマーケットにも日本の食材がよく見られます。料理の質も全く問題なく、日本料理だけでなく、韓国、インド、タイ、フレンチ、イタリアンと食に関しては全く心配する必要がありません。しかし、この国のエリート志向は半端ではなく、子供をエリート小学校に入学させるため、学校の校区内に引越す親も珍しくありません。外国人として住む分には日本人学校も2校、インターナショナルスクールも多々あり、まず問題ありません。また大学も National University of Singapore が Time 誌の世界大学ランキングの Life Science and Biomedicine 部門で 12 位、Technology 部門では National University of Singapore が 10 位、Nanyang Technological University が 25 位に入るなど、そのレベルも決して低くありません。またこの国の英語は独特で Singlish と呼ばれます。文法的にもかなりくだけていたり、語尾に La や Ma などマレー語や中国語のなかでも Hokkien と呼ばれる言語から部分的に取り込まれた単語が日常会話でふんだんに使われます。語尾にマレー語がつくのは日本語の助詞に似て馴染み易いかもしれません。個人的には食文化に二重丸です。

シンガポールの医療事情

シンガポールの医療は大きく Public と Private に分かれます。Public は現在二つのグループに分かれています。SingHealth Group は Singapore General Hospital (写真1) を中心としたグループで National Cancer Centre, National Eye Centre, National Heart Centre などはこのグループに属します。National Healthcare Group は National University Hospital を中心としたグループです。Public は日本での公立病院に当たりますが、Private は私立病院というわけではありません。個人契約で患者を治療することを Private と言います。ですから、CABG 一つが 100 万円の人もいれば、300 万円の人もいます(入院、麻酔等別途)。基本的には Public で充分経験をつんだ人が Private に移行する形がほとんどです。また公立病院のなかでも、クラスが分かれており、A クラスは個室にテレビ、担当医を指名できるなどの特権がありますが、C クラスになると政府がほとんどの治療費を負担する

反面、10 人部屋、看護師の数も格段に少なくなります。来た当時、同僚から、「窓を見てごらん。下から上まで開いているだろう？ あれが B か C, 閉まっているのが A クラス。冷房が入っているからね。」と言われました。あまりにも顕著で悲しくなったのを覚えています。

シンガポールの医学教育

この国の医療システムがイギリス系である様に医学教育もイギリス式に基づいています。出身大学は様々ですが、基本的には National University of Singapore, Ireland, United Kingdom, Australia からの卒業生がほとんどです。国籍的にはもちろんシンガポール、次いでマレーシア、インド、オーストラリア、ミャンマー、フィリピン、残念ながら、日本人はほとんどいません。大学卒業後、まず、Houseman、日本で言うところの研修医となり、一年を過ごします。その後、Medical Officer となり、約 3 年間で 6 ヶ月ごとのローテーションをしながら過ごします。この間、内科系であれば Royal College of Physicians, 外科系であれば Royal College of Surgeons の試験を受け、更にシンガポール独自の試験を受け、通った時点で Registrar への道が開けるわけです。なかなかタフな試験です。Registrar になると、次に正式に Advanced Trainee になれるかどうか問題になります。Registrar になっても、Advanced Trainee になれなければ、いつまで経っても Registrar のまま一生下働きです。Advanced Trainee になり、3~5 年の規定のトレーニングが終わるとまたまた試験があります。Exit と言われるもので専門医の試験の様なものです。これに Pass すると晴れて独り立ち... というわけにはいきません。更に海外、主にアメリカで 1~2 年のトレーニング、シンガポールに戻って更に 1~2 年、で晴れて独り立ちすることになります。ですから早い人でも 35, 6 歳でようやく独り立ちです。

National Heart Centre

私のいる National Heart Centre を紹介したいと思います。National Heart Centre は Singapore General Hospital の一角にあり、1994 年に Tan Tock Seng Hospital から移転し Singapore Heart Centre と

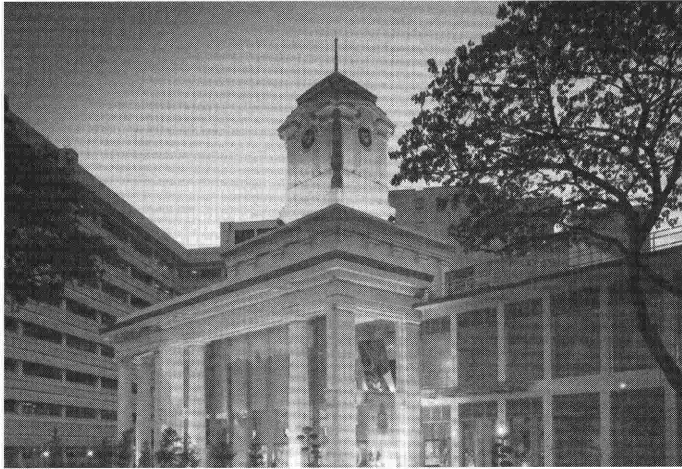


写真1 Singapore General Hospital の中心部

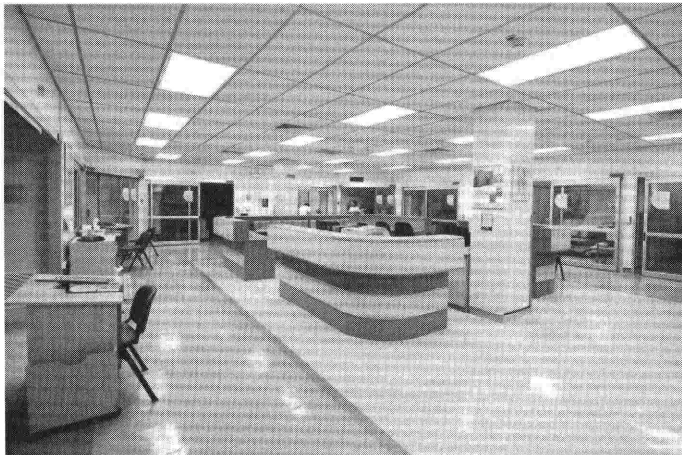


写真2 Cardiothoracic Surgical ICU

全17床。写真はICUの左半部分。

してスタートしました。1998年に現在の National Heart Centreと名称を変え現在に至ります。私が来た当時は SARS(Severe Acute Respiratory Syndrome)が猛威を振るっており、手術も緊急以外は禁止という有様で、開心術症例数も年間700例まで落ち込みました。しかし年々盛り返し、今年は1,100例の開心術と400例の胸部症例数のペースで半年を過ぎました。開心術の8割がCABG、1割が弁手術、残りを胸部大動脈、成人先天性、移植などで占めています。また Maze 手術、Dor 手術、TMR(Transmyocardial Laser Revascularization)などの付加手術やVAD(Ventricular Assist Device) Robotic 手術なども積極的に行われています。また Stich Trial(Surgical Treatment for Ischemic Heart Failure

Trial)でもその一端を担いました。研究面では National University Hospital に遅れをとっている感は否めませんが、昨年新しい研究施設がオープンし、その幅を広げています。私個人としては年間200例に第二術者、もしくは第一助手、その他、Conduitの搾取や第二助手として入っています。また開心術以外にも直当中の胸部手術や血管手術などにも入りますので、大小合わせますと年間300例程度に入る計算になります。雰囲気は至ってカジュアルで日本に帰ってもこの調子じゃ首だな、と思うほどです。来た当時は直立不動だったのが、今ではカウンターに肘をつきながら Head としゃべっています。ただし、契約社会ですので、見るところは見られています。評価は給料に反映され、

症例数が少ない，論文が無い，学会発表も無いなどとなれば，昇給もわずかになるなど，シビアな部分もあります．逆に学会発表には口演であれば全額補助，ポスターであれば70%．私自身も海外での口演と英語論文の発表を果たすことが出来ました．全体的に見ると，多少忙しい部分もありますが，親しみやすいユニットです．

こ の 先

まだまだ未定ですが，この国にもう暫くいるつもりにしています．この国の特長はその言語力をいかに，英語圏にも中国語圏にも進出していることです．また国が小さく，多民族国家であるため，

差別がなく，人材登用やサポートにも壁が少ないのです．つい先日，私の親しい同僚が Oxford への Scholarship を手に入れました．彼はシンガポール人になりましたが，もともとは香港人です．そういう面で，外国人を労働力としてしか考えない国々が多い中，私はこの国を非常に魅力的だと思っています．いつか National Heart Centre と日本の病院で共同臨床研究が出来る日がくればと願っています．

最後にこの場を借り，京都府立医科大学心臓血管外科の夜久均教授の御厚意によりシンガポールを紹介させて頂く機会に恵まれましたこと，お礼申し上げます．